

大学院シラバス

2026年度



京都薬科大学大学院

目 次

◇2026年度行事予定表【大学院】

◇教育理念・教育目的

ディプロマ・ポリシー
カリキュラム・ポリシー
アドミッション・ポリシー

◇大学院学修の手引き

1. 履修および評価について
2. 総合薬学セミナーについて
3. 学会等参加補助金について
4. 海外留学助成金について
5. 学位授与申請について
6. 次世代のがんプロフェSSIONAL養成プランについて
7. 大学院・病院連携プログラムについて

◇大学院薬学研究科薬学専攻

「次世代のがんプロフェSSIONAL養成プラン」取扱要綱

◇2026年度授業科目および単位数

◇特論講義課目

《2026年度開講科目》

創薬科学特論 2

(大石・中村_誠・南部・小林_数・小林_祐・太田・友原・岩本)

生命分子化学特論 2

(中山・高田_和・長澤_一・中田・高山・戸田・森戸・原田)

病因病態分析学特論 (武上・松本・木口・河渕)

分子病態学特論 1

(加藤・秋葉・石原・小原・河下・鳥羽・安田)

投与設計薬学特論 2 (安井・異島・伊藤・河嶋・長尾・前田)

感染制御学特論 (村木・藤室・八尋・祝迫)

研究倫理特論 (田中_智・北田・中田・前田・太田・野崎)

《2027 年度開講科目》

創薬科学特論 1 (古田・中村^誠・南部・小林^祐・友原)

生命分子化学特論 1 (藤室・中山・細木・関根・飯居・祝迫)

分子病態学特論 2 (秋葉・石原・小原・林^周・河下)

投与設計薬学特論 1

(安井・異島・斎藤^博・河嶋・前田・伊藤・扇田)

臨床薬学特論 (西口・北田・村木・辻本・冢瀬)

医薬品評価科学特論 (村木・冢瀬・地寄)

◇総合薬学セミナー

◇2026 年度担当教員一覧

◇薬学研究演習・課題研究一覧 (薬学専攻・博士課程)

◇論文博士について

《2027 年度開講科目》

創薬科学特論 1 (古田・中村^誠・南部・小林^祐・友原)

生命分子化学特論 1 (藤室・中山・細木・関根・飯居・祝迫)

分子病態学特論 2 (秋葉・石原・小原・林^周・河下)

投与設計薬学特論 1

(安井・異島・斎藤^博・河嶋・前田・伊藤・扇田)

臨床薬学特論 (西口・北田・村木・辻本・冢瀬)

医薬品評価科学特論 (村木・冢瀬・地寄)

◇総合薬学セミナー

◇2026 年度担当教員一覧

◇薬学研究演習・課題研究一覧 (薬学専攻・博士課程)

◇論文博士について

2026年度 行事予定表【大学院】

《2026年》	
4月 2日(木)	入学宣誓式
4月 6日(月)	前期授業開始
4月27日(月)	創立記念日
6月 2日(火)	課程博士学位論文予備審査願提出期限(前期)
7月 1日(水)	薬学専攻博士課程(4年制)【秋季入学および夏季募集】入学選考出願期間〔7/10(金)まで〕
7月 2日(木)	博士課程学位論文口述発表(前期), 論文博士口述発表(前期)
7月24日(金)	課程博士学位授与申請期限(前期), 論文博士学位授与申請期限(前期)
7月31日(金)	前期授業終了
8月 1日(度)	夏季休業〔9/6(日)まで〕
8月20日(木)	博士課程〔総合薬学セミナー〕開催〔予備日8/24(月)〕
8月21日(金)	薬学専攻博士課程(4年制)【秋季入学および夏季募集】入学選考
8月25日(火)	薬学専攻博士課程(4年制)【秋季入学および夏季募集】入学査定(予定) 薬学専攻博士課程修了査定・学位授与の可否決定(前期) 論文博士学位授与の可否決定(前期)
8月27日(木)	薬学専攻博士課程(4年制)【秋季入学および夏季募集】合格発表
9月 7日(月)	後期授業開始
9月30日(水)	学位記授与式〔課程博士、論文博士〕(前期), 論文博士学位論文予備審査願提出期限(後期)
10月 6日(火)	防災訓練(本校地)
10月15日(木)	防災訓練(南校地)
10月31日(土)	京薬祭〔11/2(月)まで〕
11月28日(土)	学内駅伝大会
11月30日(月)	論文博士口述発表(後期)
12月23日(水)	論文博士学位授与申請期限(後期)
12月24日(木)	冬季休業〔1/5(火)まで〕
《2027年》	
1月 6日(水)	課程博士学位論文予備審査願提出期限(後期) 薬学専攻博士課程(4年制)【冬季募集】入学選考出願期間〔1/13(水)まで〕
1月21日(木)	課程博士学位論文口述発表(後期)
1月22日(金)	薬学専攻博士課程(4年制)【冬季募集】入学選考・入学査定 課程博士学位論文口述発表(後期)予備日
1月25日(月)	薬学専攻博士課程(4年制)【冬季募集】合格発表
2月 1日(月)	課程博士学位授与申請期限(後期)
2月17日(水)	論文博士学位授与の可否決定(後期)
3月 1日(月)	薬学専攻博士課程 修了査定・学位授与の可否決定(後期)
3月20日(土)	学位記授与式〔課程博士、論文博士〕(後期)
3月31日(水)	論文博士学位論文予備審査願提出期限(2027年度前期)

教育理念

薬学の教育及び研究をより一層推進することにより、学術研究の高度化とともに、生命の尊重を基盤として人類の健康と福祉に貢献することを教育理念とする。

教育目的

高度な薬学の知識と研究能力を身につけ、基礎薬学系及び臨床薬学系の様々な薬学分野で自立した研究活動を行うことができ、かつ、国際的貢献ができる有用な人材を育成する。

ディプロマ・ポリシー

薬学専攻博士課程

本課程のカリキュラムにより、基礎薬学あるいは臨床薬学における高度な学識と研究能力を身につけ、所定の単位を修得し、かつ、独創的研究に基づく博士論文を提出し、研究科教授会が実施する最終試験に合格した学生に学位（博士（薬学））を授与する。学位授与の基準は下記のとおりである。

- 1) 薬学の様々な学術分野における高度な専門的知識と独創的な研究能力を有すること（基礎薬学研究者）。
- 2) 医療に関する高度な専門的知識と臨床薬学研究能力を有すること（臨床薬学研究者、臨床薬剤師）。
- 3) 高度な研究能力を有する医療人としての豊かな教養及び高い倫理観並びに協調性を有すること。
- 4) 国際的に活躍できる専門性と語学力を有すること。

なお、博士の学位は、本学に博士論文を提出してその審査に合格し、かつ、博士課程を修了した者と同等以上の学力を有することを確認した者にも授与する。

カリキュラム・ポリシー

薬学専攻博士課程

基礎薬学及び臨床薬学研究を推進できる人材の養成を目指す。本課程は「基礎薬学コース」と「臨床薬学コース」から成っており、特論講義、総合薬学セミナー及び薬学研究演習を通じて、医療及び薬学の様々な学術分野における高度な専門知識と独創的な研究能力を身につけ、国際的に活躍できる臨床薬剤師並びに創薬及び臨床医薬品開発などの場で活躍できる基礎薬学研究者・臨床薬学研究者を養成する教育課程となっている。また、がん薬物療法に関する高度な専門知識と基礎又は臨床薬学研究能力を有する人材の養成を目的として「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」を推進しており、「がん患者の QOL 向上および終末期医療を担う人材養成コース」及び「近未来の医薬品・治療法の開発を担う人材養成コース」を設置し、患者のライフステージに応じたテーラーメイド医療を実践できる薬剤師・創薬研究者と、近未来の治療に対して指導的立場となる薬剤師や医薬品を開発できる薬剤師の養成を目指す。

- 1) 特論講義、総合薬学セミナー、薬学研究演習などにより、研究倫理観、プレゼンテーション能力、討論能力、実践的英語力などを向上させ、各自の課題を進めながら博士学位論文作成により薬学研究者としての自立を目指す。
- 2) 特論科目については、学部科目との連携を図ることにより、6 年制薬学部を基盤とする博士課程にふさわしい様々な薬学領域における高度な学識を効果的に養うことができるよう、オムニバス形式による学術分野横断的な科目を設定した。また、他分野の基礎的及び応用的知識の修得が必要となった場合などを考慮し、基礎薬学に関する科目では、基礎的特論と応用的特論として科目を設定し、1 年次から 4 年次まで履修可能となるように設定している。
- 3) 「基礎薬学コース」は、様々な薬学領域において高度の専門的な学識及び研究能力を有した国際的に活躍できる人材の育成を目指すものであり、原則として研究室内で課題研究を進め、高度な問題発見と解決能力及び研究能力を養う。
- 4) 「臨床薬学コース」は、臨床薬剤師及び臨床薬学研究者の育成を最重要課題と位置付けるものであり、病院薬剤部などと連携し医療現場での実践的な教育研究を行う。学生は特論講義で博士課程の学生が身につけるべき専門知識を修得しながら、病院薬剤部を拠点として診療科病棟などで薬剤師としてチーム医療を実践する。また、病院の薬剤部及び医局並びに学生が所属する研究室は、特定の症例に関する臨床薬学的な研究及び臨床と基礎の橋渡しとなるトランスレーショナル研究を共同で実施することにより、臨床薬学研究能力を養う。
- 5) 「がん患者の QOL 向上および終末期医療を担う人材養成コース」では、特論科目のうち指定された科目を必修化 (3 単位) し、がんに関する基礎的知識及びがん薬物療法に関する深い知識を修得する。また、学長から指定された期間において、大学院・病院連携プ

プログラム又は地域在宅医療プログラムのいずれか1つは原則受講して、地域包括ケアシステムにおけるライフステージに応じたテーラーメイドがん治療を多職種と連携して実践、評価でき、地域医療の基盤となるエビデンス構築を担う研究者としても活躍できる研究能力を養う。

- 6) 「近未来の医薬品・治療法の開発を担う人材養成コース」では、特論科目のうち指定された科目を必修化(3単位)し、がんに関する基礎的知識及びがん薬物療法に関する深い知識を修得する。また、学長から指定された期間において、地域在宅医療プログラム、大学院・病院連携プログラム又は医薬品開発技術習得プログラムのいずれか1つは原則受講して、放射性化合物の合成や取扱い、遺伝子導入の調整技術の習得又は医薬品の開発技術を習得することにより、基礎的又は臨床的な薬学研究技術を有し、医薬品の研究開発が実践できる研究能力を養う。
- 7) 課題研究については、創薬科学系、分析薬科学系、生命薬科学系、病態薬科学系、医療薬科学系、薬学教育系及び統合薬科学研究施設に属する研究室による指導体制を整えているが、学生の希望を尊重し研究室ごとに受け入れる。また、薬科学専攻博士後期課程を担当する研究室は、研究の円滑な遂行のための指導において協力体制を構築している。
- 8) 研究室において、各自の研究課題に関する報告・討論、英文雑誌の論文紹介、輪読会などを行うことにより、研究能力の育成、研究マインドの養成、プレゼンテーション能力、討論能力及び英語力の強化を行う。これらセミナー、研究報告会などについては、薬学研究演習として必修化(4単位)している。
- 9) 総合薬学セミナー(必修2単位)は、原則として3年次の夏季休暇中に研究科全研究室合同で開催し、各自が作成した「総説」を基に発表と質疑応答を行うことにより、プレゼンテーション能力、討論能力及び論文作成能力の向上を目指す。

アドミッション・ポリシー

薬学専攻博士課程

本専攻は6年制学部を基礎とする博士課程であり、薬学の様々な学術分野における高度な専門的学識と独創的な研究能力を有した基礎及び臨床薬学研究者並びに臨床薬剤師の養成を目的としています。また、医薬品開発全般を統括できる人材の養成や専門薬剤師の育成も支援します。このため、薬学関連の学術分野への研究志向をもち、知的好奇心に満ち柔軟な思考能力を有する創造力あふれる学生を求めます。

本専攻は、薬学専攻の特性と社会的要請を踏まえ、6年制薬学卒業者を基本的な募集対象としますが、修士課程修了者及び4年制学部を卒業後6年制薬学部卒業生に相当する実務・研究経験を積んだ者も対象とし、国内外から広く人材を受け入れます。

大学院 学修の手引き

1. 履修および評価について

(1) 修了要件

【薬学専攻博士課程】

修了要件（大学院学則第33条の2）

- 1) 博士課程に4年以上在学し、研究指導を受け、32単位以上を修得し、かつ、博士学位論文の審査及び最終試験に合格しなければならない。
- 2) 在学期間に関しては、特に優れた研究業績を上げたと認められる者については、同課程に3年以上在学すれば足りるものとする。

◎修了に必要な単位数：32単位以上（大学院履修規程第8条及び第9条）

・必修科目：27単位

科目名	単位数
研究倫理特論	1単位
総合薬学セミナー	2単位
薬学研究演習	4単位
課題研究	20単位

・選択科目：特論講義 5単位以上

※ 授業実施時間の3分の2以上出席しない者は、定期試験を受験できない場合がある。

◎次世代のがんプロフェSSIONAL養成プラン学生の修了に必要な単位数：32単位

（大学院履修規程第8条及び第9条）

（「次世代のがんプロフェSSIONAL養成プラン」取扱要綱）

・必修科目：29単位

科目名	単位数
特論講義 ^{*1}	3単位
総合薬学セミナー	2単位
薬学研究演習	4単位
課題研究	20単位

注) ^{*1}：必修特論講義3科目、選択特論講義3科目以上

※ 授業実施時間の3分の2以上出席しない者は、定期試験を受験できない場合がある。

(2) 単位の認定（大学院学則第31条、大学院履修規程第9条、第10条及び第11条）

【共通事項】

履修授業科目の単位の認定は、試験（又は研究報告等）により担当教員が行う。

追試験及び再試験は、研究科長が必要と認めた場合に行うことがある。

(3) 成績評価 (大学院学則第 32 条)

【共通事項】

学業の成績は 100 点を満点とし、90 点以上を秀、80 点以上 90 点未満を優、70 点以上 80 点未満を良、60 点以上 70 点未満を可、60 点未満を不可とする。秀・優・良・可を合格とし、不可を不合格とする。

2. 総合薬学セミナーについて

【薬学専攻博士課程】

・総合薬学セミナー (大学院学則第 29 条第 3 項、大学院履修規程第 5 条)

原則として、薬学専攻博士課程 3 年次及び薬科学専攻博士後期課程 2 年次の 7 月～9 月の夏季休業期間中 (2026 年 8 月 20 日予定) に実施。学生は自身の関連学術に関する総説を作成し、研究科構成分野等が合同で開催するセミナーにおいて総説に基づいた発表・質疑応答を行う。論文執筆能力の向上に加え、プレゼンテーション能力の向上を目指す。

3. 学会等参加補助金について

【共通事項】 (大学院生学会等参加補助金取扱要綱)

取扱要綱に基づき、交通費、参加費等が助成されます。分野等主任とよく相談の上、手続きを行ってください。(大学院生学会等参加補助金支出願等申請書類は経理財務課へ提出してください。)

4. 海外留学助成金について

【共通事項】 (科学振興基金規程第 5 章大学院生海外留学助成金)

規程に基づき、渡航費及び滞在費等の実費相当額を勘案したうえ助成金額が決定されます。指導教員の推薦により申請を行ってください。(大学院生海外留学助成金申請書は研究推進課へ提出してください。)

5. 学位授与申請について (大学院学則第 33～41 条、学位規程)

【薬学専攻博士課程】

	期限・実施日	提出書類	備考
ガイダンスの実施	前期：4月 後期：10月	—	
予備審査願の提出	前期：6月上旬 後期：1月上旬	予備審査願 履歴書 論文目録 基礎報文の掲載誌名 学位論文の基礎となる報文 (別刷又は複写版) 参考論文 (別刷又は複写版) 学位論文内容要旨 共著者承諾書 論文目録及び内容要旨のデータ	用紙指定 様式指定 様式指定 必須ではない 様式指定 様式指定
口述発表 (公開)	前期：7月上旬 後期：1月下旬	—	発表 25 分 質疑 20 分
学位授与の申請	前期：7月下旬 後期：2月上旬	学位授与申請書 学位論文 論文目録* 学位論文の基礎となる報文* (別刷又は複写版) 参考論文* (別刷又は複写版) 学位論文内容要旨* 論文目録及び内容要旨のデータ* *:内容に変更がない場合、提出不要 論文審査料 (50,000 円)	用紙指定 ^{*1} 銀行口座振込

^{*1}：様式が必要な場合は指導教員にご相談ください。

【薬学専攻博士課程】

1. 学位審査体制及び評価基準について

(1) 学位論文審査体制

博士課程における学位論文の審査は、京都薬科大学大学院学則第 33 条及び京都薬科大学学位規程第 6 条の規定に基づき、主査 1 名及び副査 2 名による学位論文審査委員会により行う。

(2) 博士課程における学位論文評価基準

博士課程における学位論文の審査は、審査申請者が独立した研究者として新規性・独創性を有する研究を企画・推進する能力及び研究者としての高い倫理性を有しているか否かを基にして行う。

2. 博士学位論文の基礎となる報文について

- (1) 申請された学位論文の研究結果は、博士学位論文の基礎となる報文（以下「基礎となる報文」という。）に記載されており、かつ、基礎となる報文は、すべて論文目録に明記されていること。

なお、基礎となる報文に記載されている図表を学位論文中に転載した場合は、必要に応じて基礎となる報文を掲載している学術雑誌の出版社等に転載許可を得るとともに、学位論文中にその旨を明記すること。

なお、転載許可を得るときには、学位論文が WEB 公開されることについても併せて許可を得ること。

- (2) 申請者が、基礎となる報文のうちの少なくとも 1 報の報文の筆頭著者（top author）であること。

- (3) 学位論文の執筆について、基礎となる報文を単に日本語訳しただけのものではなく、次に掲げる事項を含めた学位論文としてふさわしいものになるようにすること。

- ① 研究課題の薬学領域における位置付け及びそれを着想するに至った背景並びに明確な仮説
- ② 得られた実験成績の再現性を確保するため、使用した試薬、材料等に関する詳細な情報、詳細な手順及び実験方法の妥当性に関する根拠
- ③ 基礎となる報文では示さなかった実験成績を含め、仮説を証明するために必要な実験成績
- ④ 得られた実験成績に基づいた科学的な考察及び当該研究成果の社会的インパクトなどを含めた薬学研究の発展への貢献

- (4) 課程博士に係る学位論文の基礎となる報文は、1 報以上（うち、少なくとも 1 報は欧文誌に掲載されたもの）とし、当該基礎となる報文は、原則として、full paper 又はそれに準ずるものであり、impact factor の付されている雑誌に掲載されたものとする。ただし、下記①及び②は、基礎となる報文に含めることができる。

なお、基礎となる報文に含められなかった未発表の実験成績等のデータは、原則として 3 割を超えない範囲で学位論文に加えることができる。

- ① 予備審査願提出時点において、受理(accepted)された原稿で、学位授与申請時点では公開されているもの。予備審査時点で受理状態であった基礎報文の場合、学位授与の申請時には、当該基礎となる報文が公開されていることを確認できる書類を提出しなければならない。
- ② 学部及び修士課程又は博士前期課程において行った研究成果を含む論文。ただし、博士課程における報文を 1 報以上含まなければならない。

6. 次世代のがんプロフェSSIONAL養成プランについて

(京都薬科大学大学院薬学研究科薬学専攻大学院教育プラン

「次世代のがんプロフェSSIONAL養成プラン」取扱要綱)

【薬学専攻博士課程】

《共通》

次世代のがんプロフェSSIONAL養成プランの履修科目は、特論 6 単位 (創薬科学特論 2、医薬品評価科学特論、研究倫理特論は必修、他 3 単位は選択)、薬学研究演習 4 単位、総合薬学セミナー 2 単位、課題研究 20 単位とする。

《がん患者の QOL 向上および終末期医療を担う人材養成コース》

地域包括ケアシステムにおけるがん薬物治療において指導的役割を果たし、高度で先進的な在宅医療に関わる研究能力を修得するため、学長から指定された期間において、地域在宅医療プログラム及び大学院・病院連携プログラムのいずれか 1 つのプログラムは原則受講しなければならない。この場合において、各プログラムの履修は、課題研究 (20 単位) に含むものとする。

《近未来の医薬品・治療法の開発を担う人材養成コース》

放射性を有する化合物の化学合成、取扱い、遺伝子導入などの調整や、これらの医薬品の開発技術を学ぶため、学長から指定された期間において、地域在宅医療プログラム、大学院・病院連携プログラム及び医薬品開発技術習得プログラムのいずれか 1 つのプログラムは原則受講しなければならない。この場合において、各プログラムの履修は、課題研究 (20 単位) に含むものとする。

7. 大学院・病院連携プログラムについて

【薬学専攻博士課程】

大学と病院薬剤部等とが連携し、医療現場での実践的な教育・研究を行うことにより、臨床薬剤師を育成することを目的としたプログラムを実施する。

連携病院：滋賀医科大学、京都府立医科大学等

実施期間：原則として 1~2 年間 (課題研究の一環として実施)

京都薬科大学大学院薬学研究科薬学専攻大学院教育プラン 「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」取扱要綱

(目的)

第1条 この要綱は、京都薬科大学大学院履修規程第6条第3項に基づき、大学院教育プラン「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」に関し必要な事項を定める。

(コースの設置)

第2条 次世代のがんプロフェッショナル養成プランに、次のコースを設置する

(1) がん患者のQOL向上および終末期医療を担う人材養成コース

療養生活の最終段階の患者に対して、高度で先進的ながん薬物治療や集学的な痛みの治療・ケアが行われる状況で指導的な役割を担い、エビデンスに基づく医療を多職種連携により実践し、評価するための研究スキルを持つ薬剤師であり、また、がん薬物療法の様々な学術分野に関する高度な専門知識を有し、基礎的又は臨床的な薬学研究能力を持ち、主として「高齢者」・「終末期」に応じたテーラーメイド医療を実践できる臨床薬剤師及び創薬研究者を養成する。

(2) 近未来の医薬品・治療法の開発を担う人材養成コース

CAR-T療法や細胞を用いた治療等、近未来のがん薬物療法に対して、分野横断的な学術分野に精通し、基礎的又は臨床的な薬学研究技術を有する薬剤師であり、また、医療機関等で放射性を有する化合物の化学合成や取扱い、遺伝子導入などを調製できる薬剤師やこれらの医薬品の研究や開発が実践できる薬剤師を養成する。

(履修科目及び単位)

第3条 次世代のがんプロフェッショナル養成プランの履修科目は、特論6単位（創薬科学特論2、医薬品評価科学特論、研究倫理特論は必修、他3単位は選択）、薬学研究演習4単位、総合薬学セミナー2単位、課題研究20単位とする。

(プログラムの履修)

第4条 がん患者のQOL向上および終末期医療を担う人材養成コースを選択する学生は、地域包括ケアシステムにおけるがん薬物治療において指導的役割を果たし、高度で先進的な在宅医療に関わる研究能力を修得するため、学長から指定された期間において、地域在宅医療プログラム及び大学院・病院連携プログラムのいずれか1つのプログラムは原則受講しなければならない。この場合において、各プログラムの履修は、課題研究（20単位）に含むものとする。

- 2 近未来の医薬品・治療法の開発を担う人材養成コースを選択する学生は、放射性を有する化合物の化学合成、取扱い、遺伝子導入などの調整や、これらの医薬品の開発技術を学ぶため、学長から指定された期間において、地域在宅医療プログラム、大学院・病院連携プログラム及び医薬品開発技術習得プログラムのいずれか1つのプログラムは原則受講しなければならない。この場合において、各プログラムの履修は、課題研究（20 単位）に含むものとする。

附 則

この要綱は、2024 年 4 月 1 日から施行する。

2026年度 授業科目および単位数

【薬学専攻博士課程】

授 業 科 目	右記以外		次世代のがん プロフェッショナル 養成プラン	
	区分	配当年次 及び 単位数	区分	配当年次 及び 単位数
		1～4年次		1～4年次
創 薬 科 学 特 論 1	○	1	○	1
創 薬 科 学 特 論 2	○	1	●	1
生 命 分 子 科 学 特 論 1	○	1	○	1
生 命 分 子 科 学 特 論 2	○	1	○	1
病 因 病 態 分 析 学 特 論	○	1	○	1
分 子 病 態 学 特 論 1	○	1	○	1
分 子 病 態 学 特 論 2	○	1	○	1
投 与 設 計 薬 学 特 論 1	○	1	○	1
投 与 設 計 薬 学 特 論 2	○	1	○	1
臨 床 薬 学 特 論	○	1	○	1
医 薬 品 評 価 科 学 特 論	○	1	●	1
感 染 制 御 学 特 論	○	1	○	1
研 究 倫 理 特 論	●	1	●	1
総 合 薬 学 セ ミ ナ ー	●	2	●	2
薬 学 研 究 演 習	●	4	●	4
課 題 研 究	●	20	●	20

授業科目	修了要件	修了要件
●印：必修科目	27単位	29単位
○印：選択科目	5単位以上	3単位以上

創薬科学特論 2 (Advanced Medicinal Science 2)					担当教員	
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	大石 真也
薬学	2026年度	前期	1単位	「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」は必修 上記以外は選択	教授	中村 誠宏
					教授	南部 寿則
					准教授	小林 数也
					准教授	小林 祐輔
					講師	太田 智絵
					講師	友原 啓介
					助教	岩本 直也

【概要】

創薬研究では、医薬シーズとなる物質の化学的特性を理解しその調製法を確立するだけでなく、物理化学的特性や生物活性・機能を解析することが求められる。創薬研究に必要な不可欠な学際的連携の基盤となる基礎的な知見に加えて、医薬探索・創製研究で実践されている最先端の科学・技術を学ぶ。

【受講にあたって】

講義内容に関する予習・復習および課題に積極的に取り組むこと。

No	項目	担当教員	到達目標
1	医薬シーズの探索技術 (1)	大石	生物活性物質の探索・創製の手法と創薬研究の展望について概説できる。(1)
2	医薬シーズの探索技術 (2)	大石	生物活性物質の探索・創製の手法と創薬研究の展望について概説できる。(2)
3	植物由来の医薬品 (1)	中村 ^誠 太田	植物由来医薬品の単離・構造解析・構造活性相関・生物活性について概説できる。(1)
4	植物由来の医薬品 (2)	中村 ^誠 太田	植物由来医薬品の単離・構造解析・構造活性相関・生物活性について概説できる。(2)
5	低分子医薬品の創薬	小林 ^祐	医薬品となる化合物が見出されるまでの創薬研究の流れについて演習を通して理解を深める。
6	医薬シーズの設計と生物活性 (1)	南部 友原	医薬シーズの設計と生物活性について演習を通して理解を深める。(1)
7	医薬シーズの設計の生物活性 (2)	小林 ^数 岩本	医薬シーズの設計と生物活性について演習を通して理解を深める。(2)
8	医薬シーズの設計と生物活性 (3)	小林 ^数 岩本	医薬シーズの設計と生物活性について演習を通して理解を深める。(3)

教科書 適時プリントを配布する。

【成績評価方法・基準】

レポートにより評価する。

生命分子科学特論 2 (Advanced Biomolecular Science 2)					担当教員	
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	中山 祐治
					教授	高田 和幸
薬学	2026年度	前期	1単位	選択	教授	長澤 一樹
					教授	中田 晋
					准教授	高山 健太郎
					助教	戸田 侑紀
					助教	森戸 克弥
					助教	原田 考輝

【概要】

生命分子科学研究を遂行するにあたり必要とされる知識、研究手法およびそのトラブルシューティング法を習得する。教科書および学術論文を用いて、その研究の簡単な背景から将来の展望にいたるまでを講義する。本講義が、知識の修得にとどまらず受講者の研究へのモチベーションを高め、自立した薬学研究者育成に向けての第一歩となることを期待する。

【受講にあたって】

予め配布される資料を、議論できるように読みこなしておくこと。

No	項目	担当教員	到達目標
1	mRNA、タンパク質の発現プロファイル評価法①	長澤	RT-PCR、realtime PCR、Immunocyto(histo)chemistryなどの解析手法の長所や短所、注意点などについて議論しながら理解する。
2	タンパク質の機能制御とその評価法	高山	化合物によるタンパク質の機能制御とその評価法を理解する。
3	生理活性脂質の機能	森戸	代表的な生理活性脂質の機能とその評価法を理解する。
4	mRNA、タンパク質の発現プロファイル評価法②	中山	FRET、FRAP、FLIP、PLAなどの光学的手法による、タンパク質間相互作用の評価法を理解する。
5	細胞死	戸田	細胞死の意義を考察するとともに、評価法を理解する。
6	がん抑制遺伝子・がん遺伝子と発がん	中田	発がんに関わるがん抑制遺伝子・がん遺伝子異常とその機能解析の方法論について理解する。
7	幹細胞の分子科学(1)	原田	幹細胞の自己複製能と多能性維持における分子機構について理解する。
8	幹細胞の分子科学(2)	高田 _和	幹細胞が分化する過程の分子機構と個体発生について理解する。

教科書 配布プリントを用いる。

参考書

①Molecular Biology of the Cell

②Molecular Biology of Cancer: Mechanisms, Targets, and Therapeutics

【成績評価方法・基準】

質問や討論、レポート等、積極的な聴講態度により総合的に評価する。

病因病態分析学特論 (Etiologic-Pathological Analysis)					担当教員
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授 武上 茂彦 准教授 松本 崇宏 助教 木口 裕貴 助教 河淵 真治
薬学	2026年度	前期	1単位	選択	

【概要】

疾病に至る原因を知り、疾病の状態を判断する臨床化学分析法および測定技術を用いた環境化学分析法を理解することは、病態の基礎を学ぶにあたり重要である。本特論では、臨床化学分析として用いられる新規なバイオセンサーやナノ粒子を用いた診断法の原理と応用、免疫測定法に関連した抗体工学の応用、質量分析法を利用したバイオマーカー分析法、ならびに疾病の原因となる環境因子およびその分析法について、それぞれ概説する。

【受講にあたって】

本特論を受講するにあたり、講義内容に関して予習を行うとともに、講義および討論に積極的に参加すること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	臨床分析法 1	武上	新規なバイオセンサーの原理と臨床分析法への応用について説明できる。
2	臨床分析法 2	武上	ナノ粒子を用いたナノ診断システムについて説明できる。
3	臨床分析法 3	木口	免疫測定法に関連した抗体工学の応用例について説明できる。
4	臨床分析法 4	河淵	質量分析法の原理と生体内バイオマーカー測定への応用について説明できる。
5	環境分析法 1	松本	環境汚染物質の組成解析と生成機構について説明できる。
6	環境分析法 2	松本	環境汚染物質の構造決定手法を説明できる。
7	臨床・環境分析法に関する調査研究 1	全員	最近の臨床・環境分析法に関する進展について国内外の学術文献情報を元にして紹介し、これを対象とした討論ができる。
8	臨床・環境分析法に関する調査研究 2	全員	最近の臨床・環境分析法に関する進展について国内外の学術文献情報を元にして紹介し、これを対象とした討論ができる。

教科書 適宜プリントを配布する。

【成績評価方法・基準】

受講態度（積極性など）、発表、レポートなどにより総合的に判断する。

分子病態学特論 1 (Advanced Molecular Pathogenesis 1)					担当教員			
					教授	加藤 伸一		
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	秋葉 聡		
					准教授	石原 慶一		
薬学	2026年度	前期	1単位	選択	准教授	小原 幸		
					助教	河下 映里		
					助教	鳥羽 裕恵		
					助教	安田 浩之		

【概要】

生体の恒常性は、神経系や体液成分、免疫系などにより巧妙に調節・維持されている。これらの調節系はそれぞれ独立して機能しているのではなく、相互に密接に関連している。すなわち、これら調節系および相互関連の異常は、種々の疾患の発生に繋がるものと考えられる。本特論では、中枢神経系、脂質代謝、心・血管機能、消化管機能の調節の概要を解説し、それらの異常により生じる各種疾患の病態を理解する基盤とする。

【受講にあたって】

本特論を受講するにあたり、生理学的、薬理的知識は予め理解しておくこと。また、講義や討論には積極的に参加し、発表においては自身の見解を述べること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	中枢神経調節機構	河下	中枢神経系の構成と機能を説明できる。
2	高次脳機能	石原	高次脳機能について説明できる。
3	血管調節機構	鳥羽	血管の神経・液性調節機構とその破綻について説明できる。
4	心臓調節機構	小原	心臓の機能・代謝の調節機構とその破綻について説明できる。
5	脂質代謝調節機構	秋葉	脂質異常症関連疾患の分子機構の理解に必須となる脂質代謝およびその調節機構について説明できる。
6	消化管粘膜防御機構	加藤	消化管粘膜防御における神経性・体液性調節機構について説明できる。
7	腸内細菌叢と消化管機能の関連	加藤	腸内細菌叢の異常と消化管機能変化との関連について説明できる。
8	腸管免疫機構	安田	腸管免疫の分子機構について説明できる。

教科書 適宜プリントを配布する。

参考書 (書名/著者・編者/発行所)

症例でわかる新しい臨床遺伝学/水谷修紀 監訳/MEDSI

【成績評価方法・基準】

受講態度 (積極性など)、発表、レポートなどにより総合的に判断する。

投与設計薬学特論 2 (Advanced Pharmaceutics and Pharmacokinetics 2)					担当教員		
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授 安井 裕之 教授 異島 優 准教授 河嶋 秀和 准教授 長尾 耕治郎 准教授 前田 仁志 講師 伊藤 由佳子		
薬学	2026年度	前期	1単位	選択			

【概要】

有効性、安全性に優れた医薬品を創出するため、患者個々に最も適した投与設計を行うために必要な、薬品物化学、薬剤学、薬物動態学、代謝分析学を基盤とした研究手法、解析方法を習得する。本特論では、プログラム、学術論文、課題を用いて講義、演習を行うとともに、受講者間で、あるいは受講者と講師の間で討議を行い、その研究の背景から将来展望にいたるまで深く考察する。問題発見能力、問題解決能力を備えた研究者や医療従事者となることを期待する。

【受講にあたって】

講義にあたっては予習を行うこと。また講義および討議に積極的に参加するとともに、発表においては自身の見解を述べること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	生体膜の構造と物理化学的性質	長尾	生体膜の構造と物理化学的性質について理解する。
2	生体膜を隔てた物質の輸送機構	長尾	能動輸送と受動輸送の特徴並びに、輸送体の構造と機能について理解する。
3	薬物の消化管・経粘膜吸収性の改善	異島	ペプチド性及びタンパク医薬品を含む難吸収性薬物の消化管・経粘膜吸収性の改善について理解する。
4	薬物のターゲティング	前田	生体高分子及びナノキャリアを用いた薬物のターゲティングについて理解する。
5	薬物動態解析法 1	伊藤	非線形最小二乗法プログラムに基づいた薬物動態解析法、投与設計法を理解する。
6	薬物動態解析法 2	伊藤	母集団解析プログラムに基づいた薬物動態解析法、投与設計法を理解する。
7	探索および臨床 PK-PD 解析	安井	探索研究における医薬品候補化合物、および臨床研究における抗菌薬・抗がん薬の PK-PD 解析と、その具体的な評価法を理解する。
8	応用 SPECT/PET 画像診断	河嶋	モデル動物解析から実臨床へと至る SPECT および PET の活用法について理解する。

教科書 配布プリントを用いる。

参考書 特にない。

【成績評価方法・基準】

討議、発表およびレポートにより評価する。

感染制御学特論 (Advanced Infection Control Sciences)					担当教員
					教授 村木 優一 教授 藤室 雅弘 教授 八尋 錦之助
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	
薬学	2026年度	前期	1単位	選択	

【概要】

抗菌薬の不適切な使用などを背景として、薬剤耐性菌が世界的に蔓延する一方、新たな抗菌薬の開発は減少傾向にあり、細菌感染症対策が日本のみならず国際社会でも大きな課題となっている。また、COVID-19 など様々なウイルス感染症が地球規模で発生しており、人類の脅威となっている。本特論では、近年流行している感染症（細菌、ウイルス）に焦点を絞り、病原微生物による感染症の発生状況、発症メカニズム、そして予防や治療を志向した最新研究について統合的に学習し、微生物感染制御学を修めることを目指す。

【受講にあたって】

本特論を受講するにあたり、講義内容に関して予習を行うとともに、講義および討論に積極的に参加すること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	病原性大腸菌感染症治療と研究	八尋	病原性大腸菌感染症と関連する研究に関して説明できる。
2	ウイルス増殖機構と研究	藤室	ウイルス増殖機構と関連する研究に関して説明できる。
3	ウイルス発がんの研究	藤室	ウイルス発がんに関連する研究に関して説明できる。
4	感染症領域における薬剤師の役割と研究	村木	感染制御・予防（Infection Control and Prevention）や抗菌薬適正使用支援（Antimicrobial Stewardship）における薬剤師の役割と関連する研究に関して説明できる。
5	感染症領域に関する調査研究#1	全員	感染症に関する英語文献を理解し、まとめることができる（演習）。
6	感染症領域に関する調査研究#2	全員	感染症に関する英語文献を理解し、まとめることができる（演習）。
7	感染症領域に関する調査研究#3	全員	調査研究でまとめた内容を表現し、議論できる（演習）
8	感染症領域に関する調査研究#4	全員	調査研究でまとめた内容を表現し、議論できる（演習）

教科書：配布プリント

参考書：ブラック微生物学 第3版（丸善出版）

【成績評価方法・基準】

質問や討論など、積極的な聴講態度により総合的に評価する。

研究倫理特論 (Advanced Infection Control Sciences)					担当教員		
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	田中	智之
薬学	2026年度	前期	1単位	必修	教授	北田	徳昭
					教授	中田	晋
					准教授	前田	仁志
					講師	太田	智絵
					客員教授	野崎	亜紀子

【概要】

自然科学は自然現象のメカニズムを解明することを究極の目標として発展してきたが、近年、その成果はときに社会を大きく変えることが認識されるようになった。その結果、国家や企業による科学研究の支援が始まり、社会と科学研究の間には緊張関係が生じるようになった。従来、研究不正（ミスコンダクト）は個人の資質の問題として議論されてきた。しかし、研究者を取り巻く近年の環境の変化は、システムとしての不正行為を誘発するようになっている。ミスコンダクトによって得られる研究成果は、再現されることはないため本質的に無価値である。ここでは、「責任ある研究活動(Responsible Conduct of Research, RCR)」を実践するために必要な知識や態度を醸成することを目標とする。具体的には、研究活動において重視される価値観、質の高い研究を実施するために必要な具体的な研究慣行、社会に成果を発信する際に必要な知識、社会と研究との関係についてそれぞれ講義を行い、最後にそれらを通じて得た知識をもとにSGDを実施する。受講者は、RCRを実践するために必要な知識、態度を身につけることができる。受講者はAPRINの提供するe-ラーニング(<https://edu.aprin.or.jp/>)を活用すること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	望ましい研究のあり方	田中智	「責任ある研究活動(RCR)」の実践の背景にある考え方を説明できる。
2	研究成果の発表	田中智	ミスコンダクトの事例を学び、適切な論文発表のあり方を説明できる。
3	研究室における研究活動(1)	北田	研究室の研究活動での適切なデータの収集・管理・処理について説明できる。
4	研究室における研究活動(2)	北田	研究室の研究活動での遺伝子組換え生物等の使用等の規制遵守や動物実験における倫理的配慮を説明できる。
5	医薬科学研究と社会(1)	野崎	医薬科学研究の実践の規制状況とその歴史的過程について、具体的な事案とともに説明できる。
6	医薬科学研究と社会(2)	野崎	医薬科学研究を担う研究者がなぜ、どのようにプロフェッショナルリズムを担うべきかを説明できる。
7	研究倫理に関するSGD	担当教員全員	研究倫理をテーマにした事例について、グループに分かれて討論を実施、それぞれについて発表と質疑を行うことを通じて、研究公正を志向する態度を身につける。
8			

【教科書】

「科学の健全な発展のために」日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会編、丸善出版(テキスト版は無償(<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf>))

「研究者のみなさまへ～責任ある研究活動を目指して～」科学技術振興機構(http://www.jst.go.jp/researchintegrity/shiryo/pamph_for_researcher.pdf)

「科学者の研究倫理」田中智之、小出隆規、安井裕之、東京化学同人

【成績評価方法】

授業への参加態度、およびレポートに基づき評価する。

創薬科学特論1 (Advanced Medicinal Science 1)					担当教員	
					教授	古田 巧
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	中村 誠宏
					教授	南部 寿則
薬学	2027年度	前期	1単位	選択	准教授	小林 祐輔
					講師	友原 啓介

【概要】

創薬科学とは、医薬品を創製することに関する幅広い知識をカバーする学問であり、天然物の探索、化学誘導、合成などの化学的知識は創薬に必須な知識である。本特論では創薬科学のうち、化学的基礎の修得を目的として、天然薬物からの生物活性物質の単離・精製と構造解析、ならびに生物活性物質の合成や創薬に用いられる有機反応の概要、不斉合成法について講義を行う。

【受講にあたって】

講義内容に関する予習・復習および課題に積極的に取り組むこと。

No	項目	担当教員	到達目標
1	単離・精製と構造解析 (1)	中村誠	天然薬物からの低分子化合物の単離・精製方法、構造決定手法を概説できる。
2	単離・精製と構造解析 (2)	中村誠	天然薬物由来の抗がん薬を例に単離・精製、構造決定方法について説明できる。
3	分子間力と反応 (1)	古田	代表的な分子間力の性質と分子間力が活用された有機反応について説明できる。(1)
4	分子間力と反応 (2)	古田	代表的な分子間力の性質と分子間力が活用された有機反応について説明できる。(2)
5	反応と立体制御	小林祐	代表的な立体選択的反応について説明できる。
6	反応と合成 (1)	南部	生物活性物質の合成に応用されている有機反応について説明できる。(1)
7	反応と合成 (2)	南部	生物活性物質の合成に応用されている有機反応について説明できる。(2)
8	反応と合成 (3)	友原	生物活性物質の合成に応用されている有機反応について説明できる。(3)

教科書 適時プリントを配布する。

【成績評価方法・基準】

レポート (5 課題) により評価する。

生命分子科学特論 1 (Advanced Biomolecular Science 1)					担当教員		
					教授	藤室 雅弘	
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	中山 祐治	
					准教授	細木 誠之	
薬学	2027年度	前期	1単位	選択	講師	関根 勇一	
					助教	飯居 宏美	

【概要】

生命現象のしくみの解明、疾病の克服および健康の増進に寄与する研究者を養成するため、生命体の基本単位である細胞の構造と機能、生命現象を司る分子の機能に関する知識など、専攻、分野を問わず薬学研究を遂行するために必要な基礎的な生命科学の知識を修得する。本特論では、分子細胞生物学の教科書、学術論文および課題を利用して講義を進めるとともに、課題に対する受講者の発表や議論を通じて理解度を上げる。

【受講にあたって】

予め配布される資料を、議論できるように読みこなしておくこと。

№	項目	担当教員	到達目標
1	転写・翻訳の基本	細木	遺伝子発現における転写及び翻訳の基本メカニズムを理解する。
2	遺伝子発現制御	関根	転写調節因子およびクロマチンリモデリングによる遺伝子発現調節機構を理解する。
3	オルガネラ (1)	未定	真核生物における核-細胞質間輸送について、特に、核膜孔を通じて行われるタンパク質・RNA 輸送の分子メカニズムについて、その解析法とともに理解する。
4	オルガネラ (2)	藤室	細胞を構成する細胞膜、核、染色体、リボソーム、小胞体、ゴルジ体、輸送小胞等の構造と機能について理解する。
5	シグナル伝達	飯居	細胞間シグナル伝達に関与するタンパク質、さらに、シグナル伝達系の解析に有用な阻害剤について理解する。
6	細胞周期調節と解析方法	中山	基本的な細胞周期の制御、および、一般的に用いられている細胞周期の解析方法を理解する。
7	ウイルスの複製	藤室	真核生物と比較したウイルスの複製機構、ゲノム複製、遺伝子発現を理解する。
8	タンパク質分解	藤室	細胞内のタンパク質分解機構と関連疾患を理解する。

原則、対面講義で実施します。特別な事情でオンライン対応を希望する場合は担当教員に申し出ること。

教科書 適時プリントを配布する。

参考書

①Molecular Biology of the Cell

②LIFE: The Science of Biology

【成績評価方法・基準】

質問や討論、レポート等、積極的な聴講態度により総合的に評価する。

分子病態学特論 2 (Advanced Molecular Pathogenesis 2)					担当教員
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授 秋葉 聡 准教授 石原 慶一 准教授 小原 幸 准教授 林 周作 助教 河下 映里
薬学	2027年度	前期	1単位	選択	

【概要】

生体の恒常性は、神経系や体液成分、免疫系などにより巧妙に調節・維持されている。これらの調節系はそれぞれ独立して機能しているのではなく、相互に密接に関連している。すなわち、これら調節系および相互連関の異常は、種々の疾患の発生に繋がるものと考えられる。本特論では、これら調節系の異常により生じる中枢疾患、脂質異常症関連疾患、慢性心不全、高血圧症、機能的消化管障害、炎症性腸疾患などの疾患の病態について概説する。

【受講にあたって】

本特論を受講するにあたり、生理学的、薬理的知識に加えて、生体のホメオスタシス調節機構について予め理解しておくこと。また、講義や討論には積極的に参加し、発表においては自身の見解を述べること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	中枢疾患 1	河下	脳神経疾患の病態および分子機構について説明できる。
2	中枢疾患 2	石原	脳神経疾患の病態および分子機構について説明できる。
3	脂質異常症関連疾患	秋葉	脂質異常症関連疾患の発症や進展に関与する分子機構について説明できる。
4	循環器疾患 1	小原	慢性心不全の病態生理と分子機構および治療について説明できる。
5	循環器疾患 2	小原	高血圧の病因と臓器障害予防への薬学的アプローチについて説明できる。
6	循環器疾患 3	小原	心腎連関の病態および分子機構を説明できる。
7	消化器疾患 1	林周	機能的消化管障害の病態および分子機構について説明できる。
8	消化器疾患 2	林周	炎症性腸疾患の病態および分子機構について説明できる。

教科書 適宜プリントを配布する。

【成績評価方法・基準】

受講態度（積極性など）、発表、レポートなどにより総合的に判断する。

投与設計薬学特論1 (Advanced Pharmaceutics and Pharmacokinetics 1)					担当教員		
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	安井	裕之
薬学	2027年度	前期	1単位	選択	教授	異島	優
					教授	伊藤	由佳子
					教授	斎藤	博幸
					准教授	河嶋	秀和
					准教授	前田	仁志
					助教	扇田	隆司

【概要】

有効性、安全性に優れる医薬品を創出できる研究者、最適な薬物治療を提供できる医療従事者を養成するため、薬品物理化学、薬剤学、薬物動態学、代謝分析学を基盤とした薬物治療の最適化の為の投与設計の概念、理論、技術等に関して基礎的な知識を習得する。本特論では、学術論文、課題等を利用して講義を進めるとともに、課題に対する受講者の発表や議論を通じて理解度を高める。

【受講にあたって】

講義にあたっては予習を行うこと。また講義および討議に積極的に参加するとともに、発表においては自身の見解を述べること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	生体膜の構造と薬物輸送機構	斎藤 ^博	薬物の吸収や透過、輸送の基礎となる生体膜の構造並びにリポタンパク質代謝系について理解する。
2	生体膜とタンパク質の相互作用	斎藤 ^博 扇田	生体膜との相互作用を介したタンパク質の構造・機能制御機構について理解する。
3	薬物の生体内動態	異島	薬物の吸収、分布、代謝、排泄について理解する。
4	ドラッグデリバリーシステム	前田	薬物吸収過程の制御、放出過程の制御及び標的指向化について理解する。
5	薬物速度論(1)	伊藤	線形1-コンパートメントモデル解析について理解する。
6	薬物速度論(2)	伊藤	線形1-コンパートメントモデル解析以外の薬物動態解析について理解する。
7	医薬品分析学(1)	安井	薬物動態や薬物相互作用を解析する上で必要となる、生体試料中の薬物や代謝物を分析するための原理および方法について理解する。
8	医薬品分析学(2)	河嶋	薬物の体内動態を可視化する SPECT および PET の原理と画像診断法について理解する。

教科書 配布プリントを用いる。

参考書 特になし。

【成績評価方法・基準】

討議、発表およびレポートにより評価する。

臨床薬学特論 (Advanced Clinical Pharmacy)					担当教員	
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授	西口 工司
薬学	2027年度	前期	1単位	選択	教授	北田 徳昭
					講師	村木 優一
					助教	辻本 雅之
					学外講師	冢瀬 諒

【概要】

社会では、有効かつ安全で安心、さらに効率的な医療の提供が強く望まれている。そのために、薬剤師は様々な角度から医薬品の適正使用を推進しなければならない。そこで、個々の患者の特徴に応じた薬剤や投与量など、適切な薬物療法を実践するためのエビデンスの創生に向けた臨床薬学に関する研究能力の醸成が必要とされている。本特論では、薬物療法において様々な患者の特性や病態の変動などに着目した最新の臨床研究事例をもとに、臨床薬学研究の遂行に必要となる知識や実践的研究手法の修得を目的とする。

【受講にあたって】

課題については予め調査しておくこと。また、講義および討論には積極的に参加すること。

No	項目	担当教員	到達目標
1	概論	西口	臨床現場における薬物治療上の問題点についての現状を理解する。
2	合併症（1）	辻本	合併症に着目した臨床研究手法や知見について、最新の臨床研究事例をもとに理解する。
3	合併症（2）	辻本	合併症やそれに伴う病態変動に応じた薬物動態ならびに薬物相互作用の変動について理解する。
4	医薬品の適正使用と臨床薬学研究	北田	医薬品の適正使用を目指した薬物治療マネジメントと臨床薬学研究について理解する。
5	臨床薬剤疫学（1）	冢瀬	薬剤師が臨床現場で行うべき副作用報告の仕組みを理解し、その活用方法について理解する。
6	臨床薬剤疫学（2）	村木	リアルワールドデータとは何か理解し、研究事例から今後どのように活用すべきか理解する。
7	病態（1）	学外講師 (未定)	がん患者の薬物治療や副作用対策に着目した臨床研究手法や知見について、最新の臨床研究事例をもとに理解する。
8	病態（2）	学外講師 (未定)	医療現場における最先端の臨床薬学研究事例について学ぶ。

教科書 使用しない（プリント配布）。

参考書 特になし。

【成績評価方法・基準】

テストおよびレポートにより総合的に評価する。

医薬品評価科学特論 (Data Science for Drug Evaluation)					担当教員
専攻	開講年度	開講期	単位数	必修等	教授 村木 優一 助教 冢瀬 諒 助教 地寄 悠吾 非常勤講師
薬学	2027年度	前期	1単位	「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」2コースは必修 上記以外は選択	

【概要】

エビデンスに基づいた薬物治療を実践するためには、薬剤師としての患者支援のあり方を理解した上で臨床研究に積極的に取り組む姿勢が必要である。臨床研究成果を正しく評価するためには、医療現場での疑問を抽出し研究テーマを構築し研究計画が立案できること、統計的評価を正しく行えることが望まれ、ファーマコメトリクス（薬学計量学）の理論をもとにしたコンピュータによる機械学習や人工知能（AI）といった「データサイエンス」の基礎を知ることは今後の臨床研究に有用である。

本特論では、薬物治療に関する臨床研究の最新事例を通じて、薬剤師と患者とのかかわりからみた臨床研究の手法を学ぶとともに、医薬品評価に必要なデータサイエンス手法について学び、薬学臨床研究に携わる上で必要な知識・技能の修得を目的とする。

【受講にあたって】

講義および討論に積極的に参加し、各自の見解を明確に述べること。各自 PC を持参のこと。

No	項目	担当教員	到達目標
1	データサイエンス概論	村木	医療リアルワールドデータ（RWD）を用いたデータサイエンスを理解し、実際の RWD に触れ、課題を考えられる。
2	臨床研究のデザインと統計解析	非常勤講師	医薬データを扱う際に必要となる主な研究デザインとその統計解析の方法を理解し、統計解析の出力を正しく読み解釈できるようになる。
3	医療における統計・AI・機械学習	非常勤講師	医療分野において用いられる代表的な統計手法や AI・機械学習手法について深く理解し、これらを通じて得られた結果を正しく評価できる。
4	薬剤師が行う臨床薬剤疫学研究	冢瀬	様々な RWD を用いた研究事例を知り、研究デザインや方法を理解する。
5	医薬品評価研究	地寄	医薬品評価研究の事例を知り、その手法を理解する。
6	データ分析の実践(1)～題材の設定～	村木、冢瀬、地寄	自ら考えた課題を解決するための分析を実践する。
7	データ分析の実践(2)～解析の実践～	村木、冢瀬、地寄	自ら考えた課題を解決するための分析を実践する。
8	データ分析の実践(3)～結果の還元～	村木、冢瀬、地寄	各自で解析した結果を発表し、他者と議論できる。

教科書 適宜プリントを配布する。

参考書 講義中に案内する。

【成績評価方法・基準】

受講態度、レポートにより総合的に判断する。

レポートとして第8回で作成する報告書を提出する（詳しくは講義内で説明する）

2026年度

総合薬学セミナー（2単位）

（学則第29条第3項、履修規程第5条）

【概要】

大学院生（原則として博士課程3年次生）は、自身の関連学術に関する総説を作成し、研究科構成分野等が合同で開催するセミナーにおいて、総説に基づいた発表・質疑応答を行う。論文執筆能力の向上に加え、プレゼンテーション能力の向上を目指す。

【企画・運営】

各科学系代表の発表対象者在籍分野等教員により構成される実施委員会を設置し、セミナーを企画・運営する。

【総説要領】

- ①テーマ：テーマは学位論文の内容を勘案するなど、分野等主任と相談して決めること。また、既存の総説の要約ではなく、自分で総説にまとめること。参考論文は5報以上とする。
- ②様式：A4判、縦型横書き、1ページ1,600字程度。総合薬学セミナーは5ページ程度とし、本文だけで2～3ページ以上とする。
- ③構成：1.はじめに 2.本文 3.おわりに 4.引用文献
英文雑誌の論文の表記は原則としてアメリカ化学会発行の「The ACS Style Guide, 3rd Edition」Chapter 14に準拠し、和文雑誌の名称はローマ字で記載する。
- ④その他：提出期限、提出先、提出部数はセミナー実施委員会の指示に従うこと。印刷原稿として、紙媒体およびPDF形式で最終原稿を提出すること。

【セミナー形式】

- ①対象：全分野等を対象として合同で開催する。
- ②参加者：科学系の教員および大学院生の参加のほか、開催案内通知等により周知し公開にて行う。
- ③開催時期：開催は**2026年8月20日（木）の予定**。（予備日は8月24日（月））
- ④企画・実施：発表対象者在籍分野教員により構成される実施委員会が企画実施する。

【発表様式】

- ①内容：作成した【総説】の内容について、口述発表・質疑応答を行う。
- ②時間：発表 20 分、質疑応答 10 分の合計 30 分程度
- ③方法：プロジェクターを使用する。プロジェクターなどの会場設備、映写用パソコン（Windows）は教務課が準備する。発表者は事前に USB 等を用いて準備されたパソコンにデータを移行しておき、発表時に投影する。

【評価方法】

- ①評価者：発表者が所属する科学系の教授とする。ただし、科学系に属さない大学院生の場合には、当該主任教授および関連研究領域の科学系教授が評価を行う。
- ②評価方法：各評価者は、実施委員会により配布された採点票に評価（4点、3点、2点、1点、0点）および必要事項を記入して署名する。総合評価は、各評価項目における評価結果の総合的な判断に基づいて行い、各系評価者全員の総合評価の平均値を、該当する学生の成績とする。成績は秀（3.5点以上）、優（3.5点未満2.5点以上）、良（2.5点未満1.5点以上）、可（1.5点未満1点以上）、不可（1点未満）をもって表す。
- ③評価項目：テーマ設定の理由、内容の正確さ、発表の明瞭さ、論理構成、投影原稿の見やすさ、発表時間の遵守、質疑応答、総説の完成度など。

【その他】

参加した教員は、評価票により講評と総説・発表に対するフィードバックを行う。

2026年度 担当教員一覧

科学系等	分野名	担当教員		
創薬科学系	薬化学	教授 古田巧	准教授 小林祐輔	助教 喜屋武龍二
	薬品製造学	教授 南部寿則	講師 友原啓介	
	薬品化学	教授 大石真也	准教授 小林数也	助教 岩本直也
	生薬学	教授 中村誠宏	講師 太田智絵	
分析薬科学系	薬品分析学	教授 武上茂彦	助教 木口裕貴	
	代謝分析学	教授 安井裕之	助教 内藤行喜	助教 西藤有希奈
	薬品物理化学	教授 斎藤博幸	准教授 長尾耕治郎	
生命薬科学系	衛生化学	教授 長澤一樹	准教授 高山健太郎	助教 森戸克弥
	公衆衛生学	准教授 松本崇宏		
	微生物・感染制御学	教授 八尋錦之助	講師 石丸華子	
	細胞生物学	教授 藤室雅弘	講師 関根勇一	
	生化学	教授 中山祐治		
	病態生理学	准教授 細木誠之	助教 戸田侑紀	
病態薬科学系	病態生化学	教授 秋葉聡	准教授 石原慶一	助教 河下映里
	薬物治療学	教授 加藤伸一	准教授 林周作	助教 安田浩之
	臨床薬理学	教授 佐藤洋美	准教授 小原幸	助教 鳥羽裕恵
	薬理学	教授 田中智之		
	分子腫瘍学	教授 中田晋	助教 飯居宏美	
医療薬科学系	薬剤学	教授 異島優	准教授 前田仁志	助教 小林勇揮
	薬物動態学	教授 伊藤由佳子	助教 河淵真治	
	臨床薬学	教授 西口工司	講師 辻本雅之	助教 茂木啓佑
	臨床薬剤疫学	教授 村木優一	助教 冢瀬諒	
薬学教育系	臨床薬学教育研究センター	教授 北田徳昭	助教 齊藤 洋平	助教 地寄悠吾
研究施設薬科学	シナジーラボ	教授 高田和幸	助教 原田考輝	
	RIセンター	准教授 河嶋秀和		
	共同利用機器センター	講師 服部恭尚	助教 扇田隆司	

2026年度 薬学研究演習・課題研究一覽

創薬科学系	
●薬化学分野	
教授 古田巧 准教授 小林祐輔 助教 喜屋武龍二	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 16週 1回 6時間 学術文献の紹介と討論 ➤ 研究報告会 4週 1回 2時間 課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会関西支部会、日本薬学会年会への参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○新規触媒的分子変換法の開発と生物活性物質創製への展開 ○新反応開発に資する分子性触媒、ならびに新規反応剤の創製 ○生物活性天然有機化合物の全合成

創薬科学系	
●薬品製造学分野	
教授 南部寿則 講師 友原啓介	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 二ヶ月に1回担当1回あたり 1.5時間、課題研究に関連した文献の紹介、解説、討論 ➤ 研究報告会 隔週1回1時間、課題研究の進行状況を報告 ➤ 学会等への参加 日本薬学会年会、同関西支部大会、反応と合成の進歩シンポジウム、複素環化学討論会、有機合成若手セミナー、メディシナルケミストリーシンポジウム、天然物化学討論会等に参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○生物活性化合物の効率的合成法の開発と応用研究 ○天然物様分子の効率的合成法の開発と創薬化学研究 ○複素環形成反応の開発と応用研究

創薬科学系	
●薬品製造学分野	
教授 南部寿則 講師 友原啓介	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 二ヶ月に1回担当1回あたり1.5時間、課題研究に関連した文献の紹介、解説、討論 ➤ 研究報告会 隔週1回1時間、課題研究の進行状況を報告 ➤ 学会等への参加 日本薬学会年会、同関西支部大会、反応と合成の進歩シンポジウム、複素環化学討論会、有機合成若手セミナー、メディシナルケミストリーシンポジウム、天然物化学討論会等に参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○生物活性化合物の効率的合成法の開発と応用研究 ○天然物様分子の効率的合成法の開発と創薬化学研究 ○複素環形成反応の開発と応用研究

創薬科学系	
●生薬学分野	
教授 中村誠宏 講師 太田智絵	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎月1回2時間 学術文献の紹介及び研究進捗の発表と討論 ➤ 研究報告会 毎週1回1時間 課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会、日本生薬学会などへの参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○生薬学を基盤とした薬用植物由来生体機能性化合物の開発 ○植物酵素を利用した機能性分子の開発 ○植物成分の生合成中間体を利用した難治性疾患治療薬の開発

分析薬科学系	
●薬品分析学分野	
教授 武上茂彦 助教 木口裕貴	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎月1回2時間 研究分野における外国語文献の解説・討論 ➤ 研究報告会 隔週1回1時間 課題研究についての報告と討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会年会、同関西支部大会、分析化学学会年会、分析化学討論会、バイオメディカル分析科学シンポジウム、生物発光化学発光研究会学術講演会、イオン液体討論会、日本抗体学会学術大会に参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○ナノ粒子を用いた超高感度発光分析法の開発研究 ○分子インプリントポリマーを用いた臨床分析用化学センサーの開発研究 ○抗体工学を基軸とする高感度免疫測定法の開発研究

分析薬科学系	
●代謝分析学分野	
教授 安井裕之 助教 内藤行喜 助教 西藤有希奈	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週1回2時間 学術文献の紹介及び研究進捗の発表と討論 ➤ 研究報告会 毎週1回1時間 研究テーマごとにグループ討論 ➤ 学会等への参加 薬学会、微量元素学会、生命金属科学シンポジウム、金属の関与する生体関連反応シンポジウム、バイオメディカル分析科学シンポジウム、酸化ストレス学会、国際学会(Int. Symp. Metallomics, Int. Soc. Zinc Biol.)など。 学外の大学や研究機関との共同研究に参加。
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○糖尿病・IBD・肝疾患を改善する亜鉛錯体の開発研究 ○炎症やがんの発症と治癒を診断するメタロミクス分析 ○老化や病態に伴うメタルトランスポーターの変動解析 ○亜鉛欠乏症に伴う疾患発症の分子機構の解明 ○抗体分子と生体金属・活性酸素種との相互作用解析 ○病態解明・創薬研究を目指したセラノスティクス研究

分析薬科学系	
●薬品物理化学分野	
教授 斎藤博幸 准教授 長尾耕治郎	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 隔週 1 回 2 時間 学術文献の紹介及び研究進捗の発表と討論 ➤ 研究報告会 毎週 1 回 1 時間 課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会主催学会等への参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○タンパク質の凝集・線維化による疾患発症の分子機構 ○膜脂質の構造と分布の制御を介した細胞機能の調節機構

生命薬科学系	
●衛生化学分野	
教授 長澤一樹 准教授 高山健太郎 助教 森戸克弥	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2 時間、課題研究関連の最新文献の紹介・討論 ➤ 研究報告会 課題研究について、隔週 1 回 2 時間の分野内及び週 1 回の教員との英語での報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会、日本神経化学会、日本味と匂学会、日本医療薬学会、日本ペプチド学会、日本脂質生化学会などに参加・報告
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○うつ病誘発性ストレスに対する感受性制御機構の解明 ○生体ペプチド研究に基づく内分泌・代謝疾患の予防と克服 ○神経・精神疾患における生理活性脂質の役割の解明

生命薬科学系	
●公衆衛生学分野	
准教授 松本崇宏	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2 時間 関連領域における原著論文の紹介・討論 ➤ 研究報告会 毎週 1 回 2 時間 研究テーマごとにグループ討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会年会、日本環境変異原ゲノム学会、衛生薬学・環境トキシコロジー等、研究テーマに関連する学会に参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○植物-内生真菌間相互作用機構の解明および創薬への応用 ○疾病予防を目指した天然由来新規医薬品シーズの開拓 ○疾病予防医薬品シーズの標的分子解明および構造最適化研究

生命薬科学系	
●微生物・感染制御学分野	
教授 八尋錦之助 講師 石丸華子	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎月 1 回 2 時間程度：関連領域の文献紹介と討論 ➤ 研究報告会 課題研究について 2 ヶ月に 1 回程度の研究室全員の前でのプレゼン報告と討論 ➤ 学会等への参加 日本細菌学会、日本薬学会年会、化学療法学会、感染症学会 毒素シンポジウム、微生物シンポジウムなど
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○細菌毒素の病原性発現メカニズムに関する研究 ○細菌感染モデルマウスによる病態発症機構に関する研究 ○薬剤耐性菌に関する分子生物学的解析

生命薬科学系	
●細胞生物学分野	
教授 藤室雅弘 講師 関根勇一	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2-3 時間、関連領域の文献紹介と討論 ➤ 研究報告会 課題研究について月 1 回程度の報告と討論 ➤ 学会等への参加 分子生物学会、薬学会、ウイルス学会、生化学会など
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○細胞内翻訳後修飾とタンパク質分解の研究 ○細胞内シグナル伝達と神経再生の研究 ○ウイルス発がんに関する研究

生命薬科学系	
●生化学分野	
教授 中山祐治	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2 時間 生命科学分野の最新論文の紹介・討論 ➤ 研究報告会 毎月 2 回 2 時間 課題研究の進行状況の報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本生化学会、日本薬学会、日本分子生物学会などに参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○細胞分裂，細胞周期制御機構の研究 ○細胞制御機構の破綻と疾患との関連に関する研究

生命薬科学系	
●病態生理学分野	
准教授 細木誠之 助 教 戸田侑紀	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 2.5 時間 新着英文雑誌の関連論文の紹介・討論 ➤ 研究報告会 毎週 2.5 時間 課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本癌学会、日本がん分子標的治療学会、日本薬学会、日本生理学会、日本薬理学会、日本呼吸器学会、等に参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○悪性腫瘍に対する新規分子標的治療薬・細胞療法の開発研究 ○気道粘液線毛クリアランス活性化機構の探究と治療応用 ○組織内微小環境におけるエクソソームの役割と治療応用

病態薬科学系	
●病態生化学分野	
教授 秋葉 聡 准教授 石原慶一 助 教 河下映里	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 2 時間文献紹介・討論 ➤ 研究報告会 毎週 3 時間課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会年会、同近畿支部大会、日本生化学会、日本分子生物学会、日本神経科学学会、日本人類遺伝学会、日本肝臓学会等に参加・発表
	【課題研究】
	<p>主な研究内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ○非アルコール性脂肪肝炎の発症制御に関する研究 ○ダウン症の記憶学習障害の発症に関する研究 ○中枢神経系における $\alpha 2$ アンチプラスミンの役割に関する研究

病態薬科学系	
●薬物治療学分野	
教授 加藤伸一 准教授 林 周作 助 教 安田浩之	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 2 時間関連分野の最新論文の紹介および討論 ➤ 研究報告会 (データミーティング) 隔週 2 時間課題研究についての報告および討論 ➤ 学会等への参加 日本薬理学会、日本薬学会、日本潰瘍学会、米国消化器病学会等に 参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○難治性消化管疾患の病態解明と治療標的分子の探索 ○腸管粘膜免疫の制御メカニズムの解明 ○腸管上皮バリア機能の制御メカニズムの解明

病態薬科学系	
●臨床薬理学分野	
教授 佐藤洋美 准教授 小原 幸 助 教 鳥羽裕恵	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 研究分野における外国語文献の解説・討論 ➤ 研究報告会 毎週 1 回、研究経過についての報告会 ➤ 学会等への参加 日本循環器学会、日本高血圧学会、日本薬理学会など
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○腫瘍微小環境理解のための基盤研究および性差を考慮した個別化医療の予測 ○心不全モデルでの心筋保護・エネルギー代謝に関する研究 ○生活習慣病における臓器障害因子としての細胞外マトリックス研究 ○歯周病・慢性腎疾患 (CKD) と脳・心血管障害関連機序の研究

病態薬科学系	
●薬理学分野	
教授 田中智之	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2 時間 課題研究に関連する論文の紹介と討論 ➤ 研究報告会 毎週 1 回 2 時間 課題研究について報告と討論 ➤ 学会等への参加 日本薬理学会、日本薬学会、日本生化学会など
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○炎症性疾患を標的とした薬理的解析 ○マスト細胞の機能発現の制御機構の解明

病態薬科学系	
●分子腫瘍学分野	
教授 中田 晋 助教 飯居宏美	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 2 時間関連領域の文献について紹介 ➤ 研究報告会 課題研究について月 2 回程度の報告と討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会、日本癌学会等に参加して研究発表及び討論を行う。
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○癌幹細胞特性に立脚した新規治療標的遺伝子を検索する研究 ○癌細胞の増殖機構の解明と抗悪性腫瘍薬の研究

医療薬科学系	
●薬剤学分野	
教授 異島 優 准教授 前田 仁志 助教 小林 勇揮	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 3 時間、生物薬剤学に関する最新の文献を紹介し討論する。 ➤ 研究報告会 毎月 1 回 4 時間、課題研究について紹介し討論する。 ➤ 学会等への参加 日本薬学会年会、日本薬剤学会、日本 DDS 学会などの学会に参加して研究発表および討論を行う。
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○アルブミンを用いた薬物分布挙動制御法の開発 ○糖鎖工学を活用した機能性 DDS キャリアの開発 ○細胞外膜小胞の機能解明と疾患治療を目的とした DDS 開発

医療薬科学系	
●薬物動態学分野	
講師 伊藤由佳子 助教 河渕真治	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2 時間程度、薬物動態学領域における専門誌中の英論文について英語で紹介し討論する ➤ 研究報告会 課題研究の進行状況を定期的に 2 時間程度で報告し討論する ➤ 学会等への参加 日本薬物動態学会、日本癌学会、日本臨床薬理学会、日本 TDM 学会、各種医学関連学会、日本薬学会年会等に参加して研究発表および討論を行う
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○薬物体内動態および病態生理の数理モデル化に基づく個別化治療最適化に関する研究 ○抗がん剤および経口血糖降下薬を対象とした PK?PD 解析に関する研究 ○癌化学療法における有害事象および治療効果の定量的治療管理に関する研究

医療薬科学系	
●臨床薬学分野	
教授 西口工司 講師 辻本雅之 助教 茂木啓佑	【薬学研究演習】
	▶ セミナー 毎週 1 回 2 時間 関連領域における原著論文の紹介・討論 ▶ 研究報告会 毎月 2 回 30 分間ずつ、各チームの研究課題について結果報告・討論 ▶ 学会等への参加 日本薬学会年会、日本癌学会、日本医療薬学会、日本腎臓病薬物療法学会、日本医薬品安全性学会等に参加・発表
	【課題研究】
	▶ 主な研究内容 ○抗がん剤の適正使用に関する研究 ○病態・食習慣の違いに着目した薬物動態学-薬力学的個人差に関する研究 ○医薬品の適正使用・薬剤師業務へのエビデンス付加を目指した研究

医療薬科学系	
●臨床薬剤疫学分野	
教授 村木優一 助教 冢瀬 諒	【薬学研究演習】
	▶ セミナー 毎週 1 回 2 時間 関連領域における原著論文の紹介・討論 ▶ 研究報告会 毎月 2 回 2 時間 課題研究の結果報告・討論 ▶ 学会等への参加 日本医療薬学会、日本化学療法学会、日本環境感染学会、日本薬学会年会、日本 TDM 学会等に参加・発表
	【課題研究】
	主な研究内容 ○リアルワールドデータ（診療報酬請求データベース等）を用いた医薬品の効果や副作用における評価 ○リアルワールドデータ（診療報酬請求データベース等）に基づいた医薬品使用動向の把握 ○薬物療法に介入する薬剤師の影響を評価する指標の探索

薬学教育系	
●臨床薬学教育研究センター	
教授 北田徳昭 助教 地寄悠吾 助教 齊藤洋平	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 週に1回2時間、臨床薬物治療、医療統計学領域を中心とした欧文専門誌について紹介し討論する。 ➤ 研究報告会 毎月2回1時間、課題研究の進捗状況を報告し討論する。 ➤ 学会等への参加 薬学会、医療薬学会、癌治療学会、緩和医療薬学会、医薬品情報学会などの関連学会に参加し研究発表及び討論を行う。
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○薬物療法のリスク最小化及び薬剤師業務の可視化に関する研究 ○データベース等を活用した臨床での医薬品評価・疫学統計に関する研究 ○数理モデルを用いた臨床医薬品評価に関する研究

統合薬科学研究施設	
●シナジーラボ	
教授 高田和幸 助教 原田考輝	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週2時間 新着英文雑誌の関連論文の紹介・討論 ➤ 研究報告会 毎月2回2時間 課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会、日本薬理学会、日本生理学会、日本認知症学会、日本神経化学会、日本組織細胞化学会等に参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○脳疾患に対する再生医学的アプローチによる創薬研究 ○組織マクロファージの生理学的・病態生理学的機能の解明と治療応用 ○幹細胞を用いた難治性疾患の新規治療戦略の開発

統合薬科学研究施設	
●放射性同位元素研究センター	
准教授 河嶋秀和	【薬学研究演習】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ セミナー 毎週 1 回 2 時間 学術文献の紹介及び研究進捗の発表と討論 ➤ 研究報告会 毎週 1 回 1 時間 課題研究についての報告・討論 ➤ 学会等への参加 日本薬学会および研究に関連する学会への参加・発表
	【課題研究】
	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 主な研究内容 <ul style="list-style-type: none"> ○生体機能の解明を目指した分子イメージングプローブの創製 ○放射性トレーサを用いた疾患モデル動物のインビボ病態解析 ○悪性腫瘍の診断と治療の融合：ラジオセラノスティクス研究

《参考》

論文博士について

(学則第36条、学位規程第3条第3項)

論文博士とは、本学大学院学則の定めるところにより、学位論文を提出してその審査及び試験に合格し、かつ、専攻学術に関し本学大学院の博士課程の学科課程を終えて学位を授与された者と同等以上の学力を有すると確認された者に授与できる博士の学位である。

●日程・提出資料等

	期限・実施日		提出書類等	備考
	前期	後期		
予備審査願の提出	3月末日期限	9月末日期限	予備審査願(第7号様式) 履歴書(本籍地記載) 学位論文(仮綴) 論文目録(第5-1号様式) 基礎となる報文の掲載誌名(第5-2号様式) 学位論文の基礎となる報文(別刷又はコピー) 参考論文(別刷又はコピー) 推薦書 研究歴証明書(所属長の証明書) 学位論文内容要旨 共著者承諾書(第11号様式) 論文予備審査手数料(100,000円) 論文目録及び内容要旨のデータ	用紙指定* 様式指定*・記載上の注意参照 様式指定* 作成要領参照 様式指定* 銀行口座振込
口述発表	7月第1週	11月第4週		受理後に日時を連絡
学位授与の申請	2026年7月24日(期限)	2026年12月23日(期限)	学位授与申請書(第9号様式) 最終学校卒業(修了)証明書 関連学術に関する総説 学位論文* 論文目録* 学位論文内容要旨* 論文目録及び内容要旨のデータ* 論文審査手数料(210,000円) *内容に変更がない場合、提出不要	用紙指定* 作成手引参照 銀行口座振込
学位授与日	9月	翌3月		

※：様式が必要な場合には指導教員又は教務課にご相談ください。

(注) 期限日・実施日が土・日祝等の場合は、原則として前日・前々日等に変更となる。

●研究歴とは(学位授与申請資格)

学位	大学の薬学部又は薬学科及びこれらと同等と認められる研究施設における研究歴			
	理科系修士の学位を有する者	理科系大学、旧制薬学専門学校卒業者		左記に該当しない者
		6年制	4年制	
博士(薬学)	5年以上	5年以上	7年以上	13年以上

備考：上表に定める「同等と認められる研究施設」とは、次の各号に掲げる研究施設とする。

- (1) 薬学に関係のある国立または公立の研究所等
- (2) 財団法人または社団法人組織による薬学に関係ある研究所
- (3) 国立、公立または私立等の病院で薬学に関係ある十分な研究施設を有する研究施設
- (4) 薬学に関係ある企業等の十分な研究設備を有する研究施設
- (5) その他学長が前各号に準ずるものと認めた研究施設